
平行結晶

オル＝トロス・クラフト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平行結晶

【Nコード】

N4620P

【作者名】

オルトロス・クラフト

【あらすじ】

しがない少年がいきなりジョブチェンジ！？そして始まる物語……かなり雑な連載作品です。

今時ありげな…それでいて、その発想はなかったわ〜を目指して頑張ります。

嘘です。面倒くさがり屋の駄目二流なので相当間が空きます。

プロローグ

プロローグ

「前を見れば、盾を持った綺麗な骨、先に進めば、剣を持った傷だらけの死体」

そこまで読んだ所で不意に声をかけられた。誰かと思ひ少しの期待、そして多少の倦怠感を持って体を向けるとそこには、やはり…

「おーい、蒼騎」

そう言つて何時もながらのハイテンションでこちらに来了。

「何を読んでいるんだ？」

こいつは自分の親友（悪友）の紅闇くれやみ 翔太しょうた。容姿は短髪で割と癖っ毛な方。性格は常時ハイテンションの友好的だ。付き合う方が気疲れする位の…しかし何にせよ親友だ。

「これが。えつと……【選択】だつてさ」

そう答え、もう一度本に目をやる。どうも納得がいかないのか、無理矢理本を置かせて両肩に手を掛け、自分の目を凝視してくる。正直逸らしたい…

「今日がどんな日か分かつてんのか？ やつと来たんだ！ この日がさ」嬉々として…ともすれば、狂氣的に話し出す。自分は別に待っていたつもりもなく、更にいえば面倒なので諭す。

「落ち着けよ。まだ始まつてすらないのに、それにいくら待つてもclassは運だと皆言つてるぞ」

そう諭しかかるが、自分の話術が下手なのか、どうも無駄な徒労に終わり時間をふいにした。ふと思つてみる。もう17年も経つた、来てみればなんとなく寂しくもあつたが、翔太の言うとおり浮かれたくもあつた。此処は【Area】のガーデン。更に詳しく現在地をいうと、南部に位置するちよつとした都市スペルタウン、特に不足したものも無く、かといつて全てが潤沢という訳でもない。言つてみれば平凡、か。今日は【キュア】の投薬日となつている。【キ

ユア」は人間の本来持つ能力を引き出してくれる薬。その目覚めた能力には一応位があり、2nd～7thまで存在する。上位にいく程希少な存在になる。セイバーの人も来るらしいので少し楽しみだ。セイバーというのは治安維持の為に世界で組織された、しかし何処の国にも所属していない軍隊組織だ。愛国心が無いと言われればそれまでも知れないが、体面を気にせず行動出来るセイバーは憧れでもある。しかし、そのセイバーになる為にはclass3rdは最低でも要るらしい。これはあくまで希望だが、class4thは欲しいと思う。

「お前の気持ちも解からなくてもないけど、あと少しだから我慢しろよ」

「そうだな…まあ、言っても早まったりしないしな」
そう言つて、静かになった。

そしてその時はやってきた。しかし一斉に投薬されるのではなく、順番らしい。そうなつては仕方が無いので、本を読むことにした。

「その選択、選んだキミのその体には、天使の如きその翼」

「キミは迷い、何かを手にもその先を目指す。その果てに見える更なる何かはキミの、ために」

其処まで読むと気づいたのだが、翔太が居なかった。席の順番で呼ばれたらしい。少し待っていると、そこそこの笑顔で翔太が戻ってきた。

「やつたぜ、俺もやつと能力者だ。まあ3rdだけど。でもよ、もうそろそろお前の番だろ」

class3rdは高度な身体限界の引き伸ばし、もしくは簡単な念力（スプーン曲げ程度の）や五感の強化が得られる。翔太の運動神経は元々高いので前者ならばとんでもないことになる気がする。

「確かにあと2、3人つて所だろ」

と何気ない会話を交わしていると、

「蒼雅…隼騎さん？あ、君…」

若い女性、というよりも女の子のような聞き慣れない声がして、少

し違和感がした。此処は高年学校なので16歳から大体20歳前後の人しか居ない筈なのでおかしい。

「お、やっと呼ばれたな。そうそう、セイバーの人って多分俺らより年下だぜ」

にわかには信じがたいが、能力は国によって投薬年齢が違うのと、能力次第で誰でも入る事が出来るセイバーの体質を考えれば変ではない。

「ああ、じゃあ行ってくるよ」

そう言っただけで教室を後にした。確か別館の予備の教室が使われるらしく、到着して扉を開けると、2人のガードがいた。ガードとは基本的に国内限定の治安維持組織で、軍隊ではない。

「よし、ではこちらに来てください」

そう言われて案内された所は密室の上遮光、防音、防振が見た感じに分かる部屋だった。予備とはよくいったものだ。明らかに専用の施設じゃないか…中にはセイバーと思われる人が居た。ヘルメットのせいで顔は窺うことは出来なかったが、声で十分女性というのは判る。何故顔を隠すのかは少し気になった。そんな些細なことを思っている

「あの、腕を出してください」

凜とした声で言われ、さっき抱いた疑問は消えてしまった。そして僕は袖をまくり、腕を出し備えた。二の腕に駆血帯を巻かれアルコールが塗られ気化熱で少し冷えた。少し待って腕の痺れとともに血管が浮き出てきたので、針が刺された。医学書で昔見た、正中静脈だと思いが、刺すような痛みが腕に走った。まあ、実際に刺されているのだから洒落にもならないが。数秒間の痛みの後に針は抜かれた。そのすぐ後から強烈な目眩が来て目の前が、暗くなり、体からは全ての力が抜けていく。まずい、呼吸まで、苦しい。

「誰…か……」

そう言っただけで死んだが、周囲の人にはあまり聞こえていなかった様で、残念だ。何故だろう、急に視界が広くなった、気がした。

ガードは少しうろたえている様で、可笑しい事にセイバーの人が一番焦っていた。そんな風になっていると、急にふと眠くなって目を閉じることにした。

漆黒そして静寂、明るいな、静かだ、とても綺麗だし、ずっと居たくなる、誰だ？あんな遠くにいるのにどうして声が、聞こえる…違う、声があるのはあそこじゃない、ずっと近く、頭の中…壊れて消えていく？これは夢なのだろうか…瞼が開いた。

「此処は」

何処、と言いたかったが、声がかすれてうまく出ない。

「水…を」

そう言うとともに持つてきてくれた。渡された水を思考ではなく本能で飲み、一息ついた。

「ありがとうございます。えっと？」

「雛乃^{ひの} 銘^{めい}です」

「雛乃さん、自分は、蒼雅隼騎と言います」

「はい、存じております」

名前を呼んだ位なので当然か。性別はともかくとして…

「それはなんというか…話は変わりますが、此処は一体何処ですか？」

「此処は、貴方の学校にある保健室ですよ」

少し呆れた様子で言われた。

それは仕方がない。先生とは割と会っし、仲も良いのだ。だが…利用は全然していない健康体なのだから…

「ところで…何故貴女は此処に居るんですか？」

「それは、貴方が前例の無いイレギュラーですから。念の為に此処に居ます」

確かにそれはそうだ。能力が制御できないと大変なことになる可能性は無きにしも非ず。得策であり定石だろう。

「そう言えば、自分のclassは幾らですか？」

今度は冷静になってきたら気になった質問を投げかけてみた。

「貴方のclassについては、不明でして…もう支障が無い様でしたらこれから調べます」

まあ、そういえば試す事無く倒れてしまった。だが、今の調子なら問題は無いだろう。

「それでしたら、多分大丈夫だと思いますから、このまま戻って検査してください」

「分かりました。では戻りましょう」

「はい」

そしてまた部屋に戻ってきた。到着すると中心部分に連れて行かれた。

「何か思い浮べて下さい」

いきなりそう言われても…仕方が無いので【選択】の中の一文節を思い出した。

「その選択、選んだキミのその体には、天使の如きその翼。」

そう思った…その時、何か言い知れないような悪寒にも似た感覚が体中を走った。その後背中に違和感を覚えた。少しスースーして変な感じになった。周りには何か、驚いているようだったが、何かが起こっているのは背中。自分では分からない…ガードの人が鏡を持ってきてくれてそこでやっと確認出来た。

「何だ…これは、氷」

驚いた。氷、それは自然物…

「class6th!？」

思考が導いた答えが思わず言葉になつて出てきてしまった。class6thは自然界の物質を創造、発生、形状変化等が可能なら希少なclassだ。ちなみにclassは5th以上になると極端に人口が減り、最高位の7thは確か…自分が知っている限り二人しか知らない。

「雛乃さん…この事は」

「絶対に、秘匿です」

「それは勿論。でも、自分は、これから一体…」

ろくな考えも浮かばず、言葉に詰まってしまった。

「とりあえず、今は安心してください。報告はしますが、今すぐにどうにかなる訳ではないので・・・」

心境を察してくれたのか口調は穏やかになったが、向こうも同じく悩んでいる様だった。

「とりあえず新しい制服を用意いたします」

そう言っただガードの一人が持ってきてくれた。ろくに考えが回らない今でも分かる。流石にこのまま戻るわけにはいかない。手を貸してもらい、背中の氷を引き剥がしてから、渡された制服に袖を通す。サイズは合っているが、やはり何かが足りない、そんな感じだった。そしてこれ以上ここに居る理由は無いので、戻ることにした。

ブログ（後書き）

質の悪いブログで申し訳ありません。

一応月に一回更新できればまともなものですのでお暇がある方は一日辺りにお立ち寄りください。

一話（前書き）

ggga注意DEATH

一話

とにかく、何故かclass6thになってしまった。これからどうしようか…やはり家族には言った方が良さのだろうか、セイバーになるのか多分無いと思うけど、暴走なんてしないはずだが…そうして答えない考え事をしていると教室に着いた。

「お、帰ってきたか、遅かったじゃん」

それは、何時間が気絶…なのは判らないが、意識が無かったのでその分時間が掛かったのだろう。

「ちよつと手違いがあつたらしい。てきとつに待っていたから気が付かなかつたよ」

「何だ…まあ、いいや。早速class教えてくれよ」

「え、ああ、その……」

本当のことは勿論言えないが、かといって上手い言い訳があるわけではない。どうしたものか…

「別に良いじゃん。俺も教えたんだから」

「2nd…そう、2nd。何かは良く分からないけど、体力限界の向上らしい」

そう言つて流すしかなかった。すると

「なんだ…残念だな…」

「まあ、良いんだよ。特にセイバーやガードになりたい訳じゃなかったから」

これ以上会話が広がらないでほしい、心から願つた。すると、願いが叶つたのか先生が来た。

「本城先生、後で身体検査お願いします」

この本城先生は担任であり、保健室の先生だ。そのお陰なのは判らないが、風邪で休む生徒はこのクラスには居ない。

「ああ、蒼騎君……分かつたわ、じゃ後で」

この蒼騎という名は自分の愛称で、呼びやすいからという理由らし

い。

「有難う御座います」

何か意味深な間を残したのが気になるが、了承を得られたので良しとしておこう。

「ではでは、HR始めます」

「はあ・・・」

HRが終わってもさつきからため息が非常に多く出る。どうしたもののか、何にせよ・・・

「い」

「おい」

「蒼騎、聞ってるか？」

「え？ああ悪い・・・」

心此処に在らず。まさにそんな言葉の通りだ。

「何か変だぞ今日のお前」

「ふう・・・そうだな。おっと、じゃあ此処で。またな」

「おう。また明日」

翔太と別れ保健室の扉を開ける。

「失礼します」

白衣に着替えた本城先生が椅子に座っていた。

「待ってましたよ、蒼騎君。まあ、まずは座って」

椅子はこの保健室には何故か先生用の物しかない。ちなみに先生の私物らしい。

「はい。そういうば、先生はこの事を雛乃さんから？」

「雛乃さん・・・それって何方かな。あ、もしかしてずっと彼方に付き添ってたあのセイバーの？」

「はい、そうです」

「へえ・・・あの女の子ね。優しいのよあの子。蒼騎君が倒れてからの時間一緒にいたし」

「そうだったんですか・・・」

今度会えればお礼を言わなければな。会えればの話だが・・・

「はい、準備できたよ、こっちに来て、」

「あ、はい」

こうして、諸々の健康診断と念の為と言われ【ケア】を受けた。【ケア】は先生の能力で細胞を活性化させ、治癒を行う技らしい。病院であつたら名医になれただろうに…

「はい、終わり。半分はよかったわ。健康そのものだもの。そして、半分不思議…どうしてあなつたのかな？」

「さあ…自分にも良く解かりませんが、ケアのおかげで体が軽くなりました」

「ま、お大事にすることで体には気をつけてね」

「はあ…では、失礼しました」

微妙な感じだ。ああ、今能力を使つたらどうなるのだろうか…やめた。騒動になるだけだ。それより家に帰つてからどう言い訳をするべきだろうか…やはり2ndになつたで通すのが一番都合が良い遅くなつたな。部活でもないし、こっちから言い訳したほうが良さそうだ。何だかな…

「はあ…」

ため息をついてしまう。何度も思う、疲れた。と…

ふと扉を開けたら、姉さんが居る。

「おつそい。遅いのよ！隼君。折角楽しみにしてたのに…今すぐclass教えなさい、幾ら？2nd、3rd？」

ショートカットの髪と何時でも真っ白なカッターを着た姉さんが迎えてくれた。嬉しくもないが…

「何で、低いのが前提なの…まあ、2nd（実際は6thだけど）だよ。当たり前、良かったね」

「良かったね…ってなによ。ちょこっとは期待してたのになあ…」

「そういう事だからさ。じゃあ、僕は部屋に居るからね」

そう言つて家に入り、階段を上がつて部屋に入り、鍵を閉める。そして、少し考えてみる。この能力について…知ろう。いや、知らなければ…もしかすれば危険かもしれない。自分だけでなく大切な

ものも失うかもしれない。まず、手始めに何をするか…

「隼君！ご飯出来たよ！下りといで！」

その前にご飯を食べようかな。とにかく、考え詰めても出ないものは出ない。それならば食事を採った方がよっぽど有意義だ。階段を下りてリビングに行く。

「姉さん、母さんからはまだ連絡無し？」

母親は仕事の都合で世界中を飛び回っているらしい。外交関係と言っていたが、詳しくは分からなかった。深く知るつもりも無かったが…

「うん、そうだよ。あ…それ持って行つて」

「あ、うん。分かった」

おっと、ちょっと多いな。まあ行けるか…そこそこに苦労しながら運び終えて並べた。

「それにしてもさ、隼君。2ndってことは何が上がったの？」

「えっと…まあ、視力のとかの向上かな」

「かな…って。まあ、良いけど。どうせお姉ちゃんなんかどうでもいいんでしょ」

「それは無いよ。これ以上家族が欠けるのはご免だよ」

「そうね。隼君ってやっぱり優しいね」

なんとなくむず痒い気持ちになったので、急いで食べた。

「さて…と、美味しかったよ。ごちそうさま。食器持って行くからね」

「流石私の弟」

そして軽くシャワーを浴びてから部屋に戻った。すっかり慣れたため息を一息ついて、改めて鍵を閉める。

「さて、どうしようかな…」

まあ、考えるよりやってみよう。まずは、基本なのは分からないが、球体。集中して瞳を閉じ、創造する…丸くて無駄の無い形、大きさはテニスボールくらいかな…冷たい。閉じていた瞳を開ける、すると

「出来た？」

その手には、ちょっといびつではあるが、しっかりと球体だった。まあ、思ったよりすんなりいった。ならば、他の形もやってみよう。四角錐、五角錐、多面体、ダイヤカット……基礎的な形は殆どやった。解った事は、自分から、もしくは、無機物。ただし、自分が触っているものからしか出せない。

形に制限等は、ほとんど無い。今日の処は此処までかな……詳しくはまた試そう。結構眠くなってきたし、そう思いながらベッドに入って電気を消した。

一話（後書き）

短く雑ですが何卒ご贔屓にお願いします。

二話

暗い……何も見えない？動かない……何だ、これは……痛い、煩い、頭が……怖い……

「うわあああ！」

これは、酷い……耳鳴りか？何だったんだろう……さっきの、まだ少し耳鳴りがしている。何だか無性に喉も渴いた。そのせいかな……何か飲もう。そう思って台所に行く。

水を飲むためにコップを取って水を注ぐ。一口飲んだところでふと気づき、それを見て創造してみる……凍れ。すると徐々に冷たく、そして硬くなっていた。そういえば試してなかったことがあった。溶けないのだろうか……溶けない。凍らせるだけらしいな。この能力は、ちよつと厄介だな。さて、このコップどうしておこうかな……散々考えて結局部屋に持ってきた。もういい、寝よう。そしてもう一度布団をかぶる。

「明るい。と、朝か」

まず布団から出る。そして着替えて台所へ行く。勿論昨日のコップも持って……それからぱつと朝食用の食材一式を出してから、まず卵を茹でる事から始め、並行してツナやハムをパンで挟み、茹で上がった卵は潰して、マヨネーズで和えてからパンに挟み弁当としてサンドイッチを作る。

次に朝食としての食材を取り出す。卵やベーコンを出して油を引いたフライパンの上へ置いていく、手馴れた作業だもう何の苦も無い。トースターにパンも入れ、皿を出し、今度は姉さんを起こす。多分今回も……と確信を持ちつつ和室へ

「姉さん、朝だよ」

そうは言ったが、反応が何も無い。今度は力を入れて体を揺さぶる「姉さん！朝だ、起きて」とそうすると

「なに？」

やっと起きたか…姉さんの寝起きの悪さに関しては折り紙つきだ。

「ご飯出来てるよ。起きて」

そのままだったらまた寝られるのは日を見るより明らかだ。即座に布団を引き剥がす。

「寒い！こっちは低血圧だよ」

そんな報告は聞いたことが無い。それにそんな兆候も無い。

「このままだったら、ご飯が冷めるよ」

「あれ！今ってそんな時間？」

「そんな時間さ。起きて、着替えて。また寝ないでね」

寝起きが悪いとはいえ、多分起きてくるだろう。

「さて、後一仕事…」

朝食の仕上げにかかる。料理を皿に乗せて、バターとジャム一式と共に持っていく。食卓に着くと姉さん、テーブルで寝ている。起きて来てもこれじゃ意味が無い。持ってきたものを全部置いてから再度起こしにかかる。

「ほら、起きないと」

「うつ…そうだね。起きたよ」

案外二度目は上手いこといったな。

「起きたなら食べよう」

「うん」

それからものの10分も掛からず姉さんの皿は片付いた。

「姉さんはいつも食べるの速いね」

「おかわり」

「量も多いし」

「早く」

「分かったよ。少し待ってて」

台所に行き、弁当の残りの姉さんがこうなることを見越して作ったサンドイッチを持って来る。

「はい、おまたせ。後、これお弁当」

「ありがとう」

「じゃあ、僕は学校に行くから」

「行つてらっしゃいのキスは要る？」

「何があつても要るわけが無いだろう。」

「要らないよ」

バッグを持つて玄関に、そして靴を履いて、外に行く。今日も遅れ気味だ。姉さんを起こす時間早めた方が良さかも知れない…何時も思うが、無理だな。あれで限界だろう。そんなことを考えていると思いのほか早く学校に着いた。

階段を上がるとき、ふと職員室が騒がしくなっていたのを疑問に思つたが、そのまま教室に行つた。殆ど皆居る。遅刻一步手前か…危なかつた。

「おお！蒼騎良かつたな！」

朝からハイテンションだな。ある意味では見習うべき点なのかも知れないが…

「一体、何が？」

「いや、さっき先生達が急遽今日の日程が変わるって」

その時、勢いよく扉が開いた。

「ごめんね…皆。なんだか今日、予定変わっちゃつた」

「ええ…」

「マジで…」

「楽になつた！」

クラスが少し沸いた。が…

「社会見学だつて」

「……」

途端に静まり返つた。さて、社会見学とは言つたものの何処へ行くのだろう…

「ああ、それと…何処に行くかはね、classs研究所でclasssについて学ぶの。去年は無かつたのに…」

何か腑に落ちない。何故ふとそんな風に思つてしまったのか…まあ、

ただ思うだけならいいか。

「あれ、もうこんな時間：皆そろそろ集合して、バス準備できたって」

「何だろう、今日は一体」

自分にも、それどころか先生にもよく伝わっていないみたいなお兄を見るにかなり胡散臭さが拭えない。しかし、学校絡みで何かが起こるわけでも無いだろう。軽率な判断かもしれないが、あまり重苦しい考えは可能性を潰してしまう。

「さあ：まあ、良いんじゃないか？」

「そうだな。授業も潰れたし」

教室から移動して、皆は続々とバスに乗っている。早くしないと席が無くなってしまう…

「早く行こう」

「おお、そうだな」

運が良いかは個人の判断次第だが、前のほうに座ることができた。これで先生から何か訊ける。

「先生…」

「何、蒼騎君？」

「今日は何でまたいきなりこんな風に？」

「さあ、私にも解からないわ。はあ、お腹空いた…」

「先生がそれですか…」

「朝は苦手なのよ。食べてはいるけど、どうしても量が入らないのよ」

姉さんよりみしたが、姉さんみたいだ。それにしても結局どうしてこうなったのだろう。結局解らないはまだ。それにしても長いな…眠くなる。寝かかったが、残念ながら着いてしまった。

「蒼騎、着いたな」

「ああ…着いた」

外を見ると、大きな建物があった、此处がclass研究所：にしては中途半端な大きさだ。世界全土に影響があるclassを研究

する所にしては小さいと思う。しかし、こんなものなのだろうか…
「はい皆、降りて降りて」

普通一番先に降りるのでは、先生…

「降りたら並んでね。写真撮るから」

其処でそんな事を降り損じた俺達に今から言うか。4、5人しか聴けて無いぞ今の言葉。もう何度目だろうか、こうゆう風なことを思うのは…何とか全員に伝えて無事に写真を撮り終わり、それから皆そろってエントランスに向かった。

「こんにちは、今日皆様のガイドを担当いたします…」

あれこの声は…

「雛乃」

さん!?

「銘ですノノノ」

かなり、驚いた。確実に幼年学校の高等性（14、5歳）が案内員の制服を着ている…周りが気にしていないことが一番驚いた。

「何だよ、あの人が知り合い?」

「あ、いや…人違いだ」

知っているだなんて言えない。言える訳が無い。臆気ではあるが、納得がいった。そういう事か…これで今日こうなったのか。

「理由が解ったよ」

「何の?」

「多分俺のせいだ」

「は?何を言ってるんだ」

「そう見えるかも知れない」

「まあ、いいや。それより遅れちまうぞ」

「そうだな。急ごうか…」

「こちらがメインの研究用ラボです」

「うわー」

「へえ…」

「スッゲー」

皆それぞれに楽しんでいるようだ。

「うわ、これ…」

何かの紙を見て雛乃さんが嘆いていた。彼女にはこうゆう事は合っていないのだろう。直感でそう思った。そのすぐ後に

「皆様、此処で、特別に抽選で一人にセイバーの制服のレプリカをプレゼント致します」

「うおー欲っしいぜー！」

翔太、多分皆そうだ。

「それって私もありかな？」

先生は十中十で無理だ。そんな心の中の葛藤をしている内に時間は過ぎたようだ。

「では、抽選の結果を、お伝えします」

さて誰か、先生はまず無いだろう、翔太はクラスの数からして、30分の1位の確立だ。かくいう俺もそう変わりはないだろうかな。

「はい。蒼雅隼騎さん」

なんだ、驚く程に 実際に驚いているが…あっさりと呼ばれた。

「こちらへどうぞ」

あれ…此処ではないらしい。

「解りました」

「いいなあ、蒼騎」

「本当よ。蒼騎君」

「まあ、運次第だったからな」

さつと雛乃さんの所に向かう。

「それでは此処へかけて待っていて下さい」

心なしかぎこちないやっぱり合っていないのだろうこういう事は、暫くして雛乃さんともう一人が来た。もう一人の方はマントをはおった人か…ただ、纏う気迫が只者ではない。押し殺してはいるが、気圧されそうだ、そういえば本人ではないが、雑誌か何かで何度か見たことがある。風奏卿とされるclasswith鈴谷 颯の筈。稀に雑誌に載っている。何故彼はこんな所に…

「まずは、【おめでとうございます】と言いますか？」

「最初から必然ではないですか？」

「良い勘をしています。ヒメもそう思いませんか」

「はい。彼は思考が鋭く、常人よりも冷静です」

雛乃さんの話し方が変わった。張り詰めた…といった方が正しい。

「それで、ただ景品の服を頂くだけでは無いんですよ？」

「ええ、そうですよ。貴方は自分が思っている以上に高位な能力を持っているのですよ」

やはり…それで此処まで色々としたわけか。まさかとは思う。しかし、これが現実なのか…

「それで自分に何をしろと？」

「命令等とは無いのですが、一応…ヒメ」

「はい。貴方はclass6th、このclassが見つかる確立は約5000人万分の1です。セイバー内にclass6thは20人も居ません」

「思ったより、少ないですね」

「反セイバーの組織も在りまして、その方にも能力者は居ますから…」

「その前にセイバーに入れ と？」

「その…できれば、ですけど」

遠くからではあるが、轟音が響いた。恐らく衝撃は凄まじいのだろう。何だこの揺れとすごい音は！？「おや、まさか奴等に来られましたが…」

三話

「これは、こんな……」

「ヒメはこういう奇襲は初めてですか？」

「初めても何もありません！奇襲ですよ……」

「それよりも皆は」

「ご安心なさい、私が行きましょう」

鈴谷さんが行くのなら、安心だ。

「申し訳ありませんが蒼雅さんは此処に居てください」

そう言い、雛乃さんも何処かへ行ってしまった。

「……解りました」

此処に居るだけで何も出来ないのか、僕は……

おや、何だこの音……近い、どうするか……考えていると、ふと小包が目に入った。失礼だろうが、何かの役に立つかも知れない。

これは、セイバーの服じゃないか……本当に景品としてあったのか。だが、これは好機だ。制服の上一枚目だけ脱いで、そこにセイバーの服を着る。上手い具合に顔が隠れるヘルメットもある。ただ武器が無い……通常は電圧の低い警棒のスタンロッドを持っている筈だが、そこまである筈はないか。

どうするべきか……そうだ、作ればいい。短時間ならば氷で……いや、

表面だけでも作り続ければひょっとしたら半永久的に持続できるかもしれない。それならば、このままいつても大丈夫なはずだ。そして走り出す。皆の所へは鈴谷さんが行った。ならばこれ以上は無駄な手出しだ。それならばさっきの音の方に速度を速める……

そろそろ着く頃だが…此処か。ものの見事に爆破され、壁が無く、瓦礫が散乱している。何の部屋かは知らないが、もう研究は出来ないだろう。誰か、コートに身を包んだ男が居る。どうやら一人のようだが…あれは、雛乃さん。だいぶ消耗しているようだ、何とか隙を突いて攻撃できれば一人くらい何とかなるだろう。それならば武器を作ろう。形状は刃物で……出来た。軽く反った形の細めの刀。取り回しは中々良い、いけるか…そのまま飛び出して、全力で斬りかかる。その時に気付かれた。もう少し…

「はああ！」

縦に剣を振りかぶった瞬間、真後ろに刀が動いた。鞘に力を込めているので刀は真ん中から折れてしまい、空を斬った姿勢で硬直した隙を衝かれ、正拳突きをされた。痛みは大して無かったのだが、かなり遠くに飛んでしまい、パニック状態のまま背中から崩れ落ちた。

「蒼雅…さん！？」

「雛乃さん…其処から下がって下さい！」

刀は折れてしまったが、新たに刃を伸ばすが、それも叶わなかった。刀の刃は途中で止まり、真ん中から折れた。何だ、奴の能力は…それから雛乃さんの能力も知りたいが、そんな暇は無いだろう。

雛乃さんがこっちに来た。

「何をやっているんですか貴方は！こんな、事…」

よく自分の体を見てみれば、存外に服が破れていた…やはりレプリカか。傷は無いのだけど…

「雛乃さん、すいません。今の自分には…これしか、出来る方法がないんです」

「でも…もう大丈夫ですから…」

その言葉は全く信用出来ない。完全に空元気であることは明白だ。

「此処くらいしか無いんですよ。自分が居るべき場所は」

「さて、何処の誰とも知らないが…貴様は民間人か？」

「今のところはですけど…」

「セイバーになるのか？」

「この格好をどう受け取るか。解らと思うが…」

「そうか…ならば、これを受けてみる…！」

まずい。奴が自分の折れた氷の刃を幾らか持ってこちらに投げる。速度が半端ではない…雛乃さんは突然近くの瓦礫が動いて彼女の前に倒れた。自分の方は間に合うか…刹那の間で、頭の中に即座に思い浮かべる。平面、六角形、なるべく大きく…

「アイ…ギス!!」

思わず目を閉じてしまった。神の盾のつもりだったが、使う人間がこれでは駄目だな…

「う……」

浅い方だが、手のひらが痛い。自分の出したアイギスは、刃に貫通されていて周りはひびが入っていた。幸いなのは自分の手は少しばかり刺さっているだけだった。

もうアイギスに意味はない。無理やり引き剥がし、再び剣を作り、奴へ向かって走り出す。そして突然止まり、左手からダガーを作り、そのまま投擲する。が、またしても届くことはなく、そのまま投げた軌道で戻ってきた。

「何!」

横に跳んで避ける。避けることが出来たが、いまだに勝機が見出せない…その時、

「目的はもう達成している。もう遊びに費やす時間は無い。それでは、ヒメ…」

奴はそう言い放ち、軽く地を蹴って、そのまま空に飛立って行った。体が、糸を切ったマリオネットみたいに堕ちていく……

「蒼雅さん…蒼雅さん!起きてください」

とても怪我人に行うと思われる限度を超えて揺さぶられる。大して

動いたわけではない。それなのに身体が痛い…痛いのに、答えないとこれ以上はやばそうだ。

「まだ、起きて…ますよ」

「蒼雅さん、起きてくれた」

「完全に堕ちたわけじゃないんです。堕ちそうですけど」

「そんなこと…言わないでください」

「痛い、痛い、離して下さい」

体を絞めないで欲しい。本当に堕ちてしまう。

「あ…ごめんなさい」

それでも手を掴むのか。これといって不都合も無いが、皆のところへ行きたい。向こうが無事なのは確かめるべくもないが、それでも…

「してやられましたね。私が残るべきでした…」

「鈴谷さん…何で此処に」

鈴谷さんが来るということは、危険は無くなったということなのだろう。

「もう全ては終わったからですよ。と言いましても、あれを奪われましたが…」

「あれ…って、まさかあのサンプルを！」

「私個人の確認です。大きい声で言わないように。それと彼は貴女の思うほど脆い存在ではありませんよ」

「そう…ですか？」

「そうですね、彼の意志で此処に来たのです。といっても、まさか闘ってたなんて…私も想定外でした」

「あの、鈴谷さん、襲ってきた奴等は一体…」

正体不明の敵にやられてばかりではあまりいい気分はしない。セイバーに開示義務というものは存在しないが、個人的な意見ならば守秘義務は関係ないはずだ。

「ええ、詳しくは後ほど。敵は全て倒しましたが、ソード無しはもう嫌ですね。それよりも貴方の事態の言い訳を考えましょう」

「あ、じゃあ転んだってどうですか？」

現実的に考えてそれは不可能だ。この傷は転んだところで出来る傷ではない。

「雛乃さん、それはちょっと無理です」

「ええまったく。ヒメはそういうことは苦手ですね」

「とりあえず、制服に着替えて、怪我は隠すことにします」

まさかこんなことを雛乃さんが言うなんて…聡明そうだと思っていたが、そうではなかったようだ。

「それが妥当ですね。ヒメもそれで良いですよね？」

「はい、勿論です…」

ならば早速と二人に急かされ、戻って制服を着た。

「はあ、昨日に続き、なんだかな」

「それはお疲れ様です。では私達はこの辺で行きましょう、ヒメ」

「はい。じゃあ蒼雅さん、また明日」

「はい……また明日？」

「あとこれは、電話番号を書いた紙です、落ち着いたらこれに掛けてください」

そう言うとき数字を書き込んだメモ用紙が渡された。

「分かりました」

雛乃さんの言葉は何かしっくりこないが、まあ良いか。それはさておき、体が治るのに三日くらい掛かりそうだ。後、このぼろぼろのセイバーの服のレプリカは持って帰るのだろうか。

「あの」

二人に訊こうと思ったが、居なかった。置きっぱなしというのものがと思うので、元あった小包に入れて持って帰った。

「おう、蒼騎… やつと戻ってきたか、遅くなってたな」

「蒼騎君、やつと戻って来てくれた。怖かったのよ、これでも」

「伝説の鈴谷颯が来てくれたんだぜ！」

知っている。行くと明言したところから知っている。

「ああ… もう帰ったけど…」

「探してみないと何もいえないじゃんか。サイン貰って来てくれよ」

「多分、居ても無理だと思うぞ。というか、帰ったと言ったろう」

「で、先生、もうそろそろ帰るんですよね？」

あれだけのことが起こってこのまま居るとは思えない。

「颯様が帰ってしまえば居る意味も無いわよ」

「じゃあ… さつさと帰りましょうか」

「そうね。皆居るし、帰りましょうか。あ、ところで蒼騎君、セイバーの服はどうしたの？」

答えても良い。しかし、現物は見せられない…

「あ、それ俺も見たい」

翔太よ、見たら悲しむことは保障できる。

「あ……なんだかんだで受け取れなかったです」

「何か悲しいね、蒼騎君」

「右に同じ」

「同情するのならタオルをくれ。【貸して】じゃないよ」

「何でタオルなんだ？まあ、スポーツタオルだったらいっぱいあるからいいけど」

「切るけど良い？」

「そもそもあげるわけだし、家に腐るほどあるから良いぜ……どうするんだよ？」

「包帯にする」

「どうしたんだ？」

「……転んだ」

「はい皆こっちに来て、バス来たよ」

集合してからふと思ったが、皆は結構落ち着いている。鈴谷さんのお陰だろうか…そう思うと凄い。流石は伝説といったところだ…c

lass的には一段階しか違わないが、7thは別格だ。

質ではなく、一人であるにもかかわらず、二つの能力か…まあ、自分分はこれで十分過ぎるかな。気分を変えようと本を広げる。

「その果てへ、続きし道は遠くとも、この翼と………を持って、キミは…」

もう欠落がある章だったのか。古い時代の神話を解読して若干脚色をして書籍にしたというもので興味がそそられたが、風化してはどうしても解読出来ない所があるらしい。

「その……の先には、幾多の影がある、しかし、………の手を取り向かうものも居る…キミは叫んだ……神は………つてみせる………の為」

最終章の文節は修復や解読はされないのか、古代の神話とは聞こえは良いが、どうも駄目だ。

「なあ、蒼騎、読んでるそれって面白いのか？」

「うん…まあ、そうかな。他にもあるけど、見るか？」

「いや、遠慮しとくぜ」

「あ、そうだ。蒼騎君、体の具合…悪いでしょ」

「実をいうと結構、悪いです」

「隠そうとするのもいいけど、分かってるからね…それでも」

いつもはともかく、こういうことでは流石だと思う。が、人が多いこんなところで言わないで欲しい。こちらにも都合はあるし、痛みと血を止めるために氷で幕を張っている。日は浅いが、つくづく応用次第だと思うこの能力は…

「治そうか？今此处で…すぐ済むよ？」

「いえ、治す程じゃないので遠慮します」

今ここで知られる訳にはいかない。しかし、このままでは治る時間が掛かるので家に帰ってから絆創膏と湿布でも貼ろうかな…何だかんだで皆は寝ている。自分も疲れたし睡眠という対価は正当だろう

……

「なあ翔太、着いたら起こして」

「俺も寝るし、保障できないぜ？」

「どつちみち最終的に先生が…」

「無理」

ああ、これは無理だ。頭がガクガクしてまぶたは閉じそうだ。普通は起きておくべきではないのか、先生は…期待はしても無理だと思うが、眠いし寝よう……

誰だ、何だ…笑っている？悲しんでいる？音が、痛い、頭が、苦し

い、光、声？誰……！！

「蒼騎」

「翔太……か……」

「蒼騎、酷くうなされてたぞ」

「昨日もこうだったな」

寝ると耳鳴りか……おや、やけに体が軽い。

「先生？」

「颯様……うえ？」

軽く引いたが、それは置いておこう。

「学校？」

「残念ですが……道中です」

「着いてないなら、一度寝するからね」

先生を起こした意味はなかったようだ。もう寝る気にはならないし、残り少ない本でも見ておこう。

「キミは傷つき．．．なかつた、微かに見えた．．．星の輝き、
 ．．．．．取り．．．握り．．．眼差し．．．
 神を．．．星となる」

「……………が倒れ……………は微笑……………キミ……………流し……………思う……………キミは気が付く、そして、笑い……………た……………は笑って、泣いて……………いた」

「全ては……………であ……………ある、しかし二つは永……………あり……………神をも……………でき……………超えられる」

突然揺れが収まる。どうやら着いたようだ。丁度よくこの神話もう残ったページはない。そうだ、先生を起こさないと…

「先生、着きましたよ。起きてください、起きてください」

「ん、おはよう蒼騎君」

「おはようございます、後は自分と先生だけですよ」

「あつれゝそんなに寝てた？」

このやり取りはもう何十回目かだ。

「はい、2、30分くらい掛かりましたよ」

姉さんみたいだというのは心の中に留めておこう。

「颯様の闘い方、華麗だったな」

「そうですか…」

見てみたかったが、仕方ないか…能力を試せただけでも儲けものか

な。無論怪我は採算に入れないが…

結局の所、事件は表向きには損害はあったが、一件落着いた。という結果で終わったらしい。学校では心身の負担が大きいとのことで翌日を休校にといわれ、何ともいえない気持ちのまま家に帰った。しかし、結局の処何故身体が治る速度はこんなにも速いかは解らずじまいか…別段身体が丈夫というわけでもないのに…そんなことを考えている間に家に着いた。ドアを開け、リビングへ行くと、姉さんがテレビに食い入るように見ていた。

「あつれ〜？これって隼君に似てるんだけどな」

テレビ…監視カメラの映像か。犯人逮捕のために流されているのだろうが……何！？自分達が戦っているところが…何を考えているんだ、鈴谷さん…

「あ、れ…姉さんこのニュースは、研究所での襲撃事件？」

「うん、そうなんだけど、これ隼君じゃない？」

指差している先は雛乃さんと自分だ。しかし、迂闊というか、自分を映すメリットがないだろう。消せば良いのに…

「さあ？他人の空似じゃないかな。三人は居るっていうし…」

「ふうん…まあいいけど、おやつ要る？」

どうしようか…小腹も空いてきたので丁度良いか。

「ちなみにそのお菓子は何なの？」

「林檎のジェラートだよ。ちょっと問題があるんだけどね…」

「何なの、その問題って？」

「いやーまだ出来てないんだよね」

「というと？」

「まだね、凍ってないのよ…」

「ああ、それならちよつと見てくるよ」

冷凍庫の扉を開けて見てみるとまだ液体の状態だった。これでは林檎のジューズだ。容器に触れるとあることを思いついた。あの時、アイギスと叫んだ時、無意識にイメージをした。一瞬だけのイメージだが…盾が出来た。剣はイメージだけだったが、出来るのかも知れない。言葉でのイメージか…

「凍れ、固まれ…フリーズ？」

どうやら無機物ではないので凍らないらしい。能力の限界だな。これ以上どうも出来ないので戻る。

「ね、凍ってないでしょ…」

「まあ、仕方がないよ。じゃあ、部屋に居るから」

部屋に入ってからふと思いついて携帯電話を取る。この番号だな…微妙な時間だが、落ち着いたらと言っていたので裏を反せば落ち着けば何時でも掛けていいことになる。かなり屁理屈な気がするが、いいだろう。とりあえず電話をする。

「もしもし、雛乃さんですか？」

「本郷ですが…何方ですかな」

あれ…？一体誰だ…部署にかけたのだから当然といえば当然か。

「あの、雛乃さんの上司の方ですか？」

「ええ、一応父親だが、何方ですかな、貴方は…」

「これは失礼しました。自分は蒼雅と申します」

「これはご丁寧に。で、銘に何か？」

色んな所で戸惑うな。だが…

「何かといたしますか、電話をと言われたので、この番号に…」

「そうでしたか。では、宜しければ明日でもお越し下さい。これから住所を言いますので……」

「あ、はい。どうぞ」

住所を書いたメモと幾つかの疑問だけが残った。まあ、明日に行ってみるか…折角の休校だから。やっぱり少し疲労が残っているので横になった。

……苦しい。気持ちが悪い……怖い。何だ……誰だ……白い髪……

仮眠のつもりが結構寝てしまった。そして、やはりいい夢は見れなかった。降りてみると、姉さんがたくさん的小魚と格闘していた。

「手伝おうか？」

「あ、隼君……うん、お願いね」

さて、やるか……包丁を取って、魚の頭を落とし、腹部の方に刃を滑らせてあらと臓物を落としていく。

30匹くらいだったが、ものの数分も掛からない、苦もない作業だ。そのはずなのに何故時間が掛かるかな……姉さんの分野の問題ということか。苦手ということなのだろうか、最初から頼めばやったのに……いつも変なところで遠慮するのだろうか、姉弟だろう、と少し複雑な気分だ。

「ところで、姉さんこれって揚げる？焼く？」

「煮ようかと思ってるんだけど……」

「いや、これは小魚だから煮物はどうかと思うよ」

「じゃ、かき揚げにしよう」

「かき揚げ？唐揚げじゃなく」

「かき揚げなの」

小魚のかき揚げは聞いたことがないが、まあ良いだろう。

「分かったよ」

「うん、ならさっそく、隼君野菜切ってー」

「分かったよ」

結局通算で2時間くらい掛かった。

「いっただつきまーす！」

「いただきます」

「美味しいな」このかき揚げ」

「もう、それはかき揚げじゃなくて大盛り天井だよ」

「隼君、おかわりお願い」

速いな。流石は姉さん…

「分かったよ」

「特盛りで、お汁もお願い」

「分かってるよ」

器を受け取り台所へ行く。ご飯を入れてから、かき揚げと天ぷらを乗せる。そして即興で作ったたれをかける。味噌汁も忘れずに…持つていく。

「隼君ありがとう」

「はい、姉さん、そうだ、あのアイス出来てたら貰っても良い？」

「別に良いけど幾つ位欲しいの？」

「五つほどかな」

「三十個近くあるからもうちょっと持って行っていいよ。でも、そのアイスどうするの？」

「知り合いへのお土産かな……」

電話でしか会話してないが

「溶けないようにね」

「勿論分かってるよ」

金属の器に入れるので、もう溶けるわけは無いのだが……しかし、そんなに多めに作ったのか。姉さんは……謎は残るが、このまま部屋に上がることにした。

明日は休みだが、そこそこ遠いところに行くし、寝ておこうかな、電気を消す……

うるさい、うるさい……誰か、助けて……

暗いなかに誰かが居る？君は、白い髪の毛……待って、助けて、行かないで……音が収まった！？何故君は微笑む、どうしてそんなに白いん

だ
⋮

四話（前書き）

前回指摘があつたので近いうちに用語とかをあとがきに書いておきます。現在確認して作成中です。

四話

光、朝なのか、もはや悪夢にも等しいなこの耳鳴りは、何か薬でも買おうかな、このままなら睡眠が苦痛になる。いつもより急いで着替える、そして下に行く。

そのままやや急ぎ目のペースで朝食を作る。このままなら何とかなりそうだが、一安心かな…だが、後は姉さんだと一瞬で焦りを取り戻し和室へ急ぐ。やはり此処か…急いでいるので仕方ない

「クルタナ」

小さく、それでいて再現する……掌にはアイスの棒位の小さな板のような剣が出来た。そしてそれを額に乗せる。

「zzzz…zzzz…ひゃああー!？」

おっと、存外に効き目が強かったか。まあ、今日急ぎは姉さんだけだから今日はちょっと我慢してもらっけ。

「起きた？姉さん」

「隼君、冷たいよく分からないけど、もう止めてね、そういう起こし方」

「ごめんね、姉さん。でもこの調子だったら、たまにするかも」

「うーん…出来るだけ止めてね」

「分かったよ」

いつでも出来るけど、控えめにしたほうが良いな。

「それはともかく、ご飯作ってあるから」

「やった！じゃ、着替えていくから　　って…あれ？隼君、今日学校は？」

「言ってなかったかな？今日は休校なんだ」

「そーなのかー！羨ましいなー」

「そうなのさ、じゃ仕上がりがあるから」

とはいっても、後に残ってるのはテーブルに置くだけなんだけど…
気楽に台所に行く。そのままぱっとテーブルに作った朝食を並べていく。ついでに今アイスも用意しておこう。

「隼君、今日のご飯は何？」

「トーストとベーコンエッグあとサラダ最後に余りものの林檎の干枚漬け、砂糖の」

「ジャム？」

「みたいな物かな、トーストに乗せると案外いけるよ」

「じゃ、お弁当は？」

「煮物主体のおかずと漬け物かな」

「和風だねー」

「朝食と弁当はそこに置いとくから」

「あれ、もう行っちゃうの？」

「まあ、そこそこ遠いから念のため。だね」

「じゃ気を付けて、あとアイス溶かさないように」

「大丈夫だよ、それより姉さんはいいの？こんな時間だけど」

「ああ…このままじゃいけない」

そういえば、こんな毎日の積み重ねで慣れたが、最初のころは目覚まし時計の音で自分も起きて、手伝いをしているうちに自分が主体から最終的に担当になった。変に昔を思い出してなんだかくすぐったいような気分になったので、さっさと振り払った。靴も履いて、意気揚々と扉を開ける。それから、立て掛けてあるスケートボードを取る。結構距離があるのでこれに乗って行く方が都合は良くなる。特別少々いじってあるが問題無く動くので少し安心した。乗ってかと思っただ、俺以外動かせない。そんなことはさておこう。乗って進んでいく。でも、そのまま速度は落とさず進む。時々休憩がてら箱の中を見て、溶けかかってすらないのだが、この間に容器の淵に触れて内部の空気を冷やしておく。段々と慣れてきたな、この能力にも。

地図と標識それから、教えてもらった住所を比較して……案外来ているな…あともう少しか。と、これで結構な回数冷やしていたが、あと数回もせずに着きそうだ。

それから、幾分もしない間に着いた。

「はあ…さて、どうなるやら…」

指定された場所は事務所でもなんでもなく、普通の家だった。多少の心配はあるが、インターホンを鳴らしてみる、それからものの数秒で玄関が開けられた。

「ようこそ、蒼雅君…でしたかな？」

低く少し重たいそんな声…見た目も全く相違無い屈強な男性だ。

「はい、蒼雅隼騎です。身分証明のIDでも見せましょうか？」

「いやいや、そこまで神経質ではない。まあ、立ち話もなんですのでこちらへ」

「あ、その前にこちらをどうぞ」

「それは一体なんですか？」

「林檎で作ったジェラートです。溶けやすいのですぐに冷凍庫に入れてください」

「う」丁寧にも

そして客間に案内されたが、基本的に空気が重い。住所を間違っ

はいない筈だが…本当に雛乃さんは居るのだろうか…

「さて、蒼雅君…君を此処へ呼んだ理由は解かっているかね？」

「大まかには…解かっているつもりですが…」

「そうか、まさかこの日が来ようとは、あいつになんて言うか……」

「あいつ??？どういう意味ですか？」

「おや、知っていると思うのだが…」

全く聞いていない。話の中の欠片にも出てきた覚えがない。まさか鈴谷さんのことではない筈だし、記憶力は悪い方ではないと思うのだが…

「多分知らないことだと思います」

「そうか、では簡単に説明しよう。君も知つての通り、私の苗字は本郷で、娘が雛乃という理由だが、銘は雛乃の忘れ形見でね」

「そうだったんですか……」

「銘から聞かずに？」

「といたしますか…雛乃さんのことはそこまで、というよりも、ほとんど知らないんですか…」

二度ほどしか会っていないのにそんな深いところまでいえる仲になるとは思えない。

「……はて、意味が解かりませんか？」

「覚えている限りですけど、雛乃さんとはまだ二、三回位しか会っていませんが」

「何でそんな男に、銘は好意を抱いたんだ！」

突然叫ぶとは…結構な音量だ。下手をすれば近所迷惑になりかねない程の…

「貴様、能力で銘になにかしたか？」

後ろに回られ……絞め殺される！？しかし、何かを言うにも答えられない。息が…でもこのままでは確実に堕ちるので、頑張らないと…

「じ、自分の能力は、こお……」

しかし残念ながら、視界は暗転した。

暗いが、前とは違う。見える、でも結局痛みと、恐怖が体から抜けない。そんな状態で思った。あの白い子にもう一度逢わないと…痛みが、酷くなってきた。

なんだろう、突然景色が変わった。此処は、廊下？？それに壁一面にドア。その一直線に伸びた道の先に白いあの子。確認したのか、すぐに走り出した。あの子は華奢な子供なのだが、いくら走ろうとも、追いつけない。その最中、あの子は突然ひとつのドアに手を掛

け、その中に入った。

そのすぐ後にあの子のドアの前に着いた。そしてドアを開ける、光？なんだか不思議な気分だ。そのまま目を閉じていく。

「う……？？」

起き上がる。どうやらそんなに長いこと気絶はしてなかったようだ。

「蒼雅君、さっきは取り乱してしまった…済まない、君の能力は何なんだ？」

どうやら正気に戻ってくれたようだ。自分はこういう誤解を掛けられていたのか…

「はい。自分の能力は、氷の発生や触れたものを凍らせる能力です。一部例外はありますが…で、自分が墮ちる前、本郷さんが仰られたことは、どういう意味ですか？」

「どうも…どうも…」

「ふわぁ～お父ちゃん、おなかすいたよ～」

すごく寝ぼけた、雛乃さん？寝ていたのか。人が窮地という時にも関わらずというか、睡眠に対するその力は姉さん並みだ……

「銘、起きたか。蒼雅君が来ているぞ」

「しょうがさん？」

「おはようございます、雛乃さん。一応注意しますけど、さっきか

ら滑舌が酷いですよ。それと…非常に言いづらいですけど、パジャマ…はだけています」

「ふえ…あれ、蒼雅さん??」

俺を確認する前に、髪くらい梳とけばいいのに。そして、パジャマのボタンはするべきだ。

「雛乃さん、どういことですか?」

「え……うああ!!待って下さい!」

着ている緋色のパジャマのように赤くなって、雛乃さんは何処かへ行った。

「……」

「……」

「あの」

「何かな?」

「その、会話の続きをお願い出来ますか?」

「いや、それがもう何がなんだか分からなくなってきてね。銘を待つてもらえるか?」

「はい」

それから数分後、まともな服になった雛乃さんと三人でいくらか話した。ただ、服は変わっても顔の赤みはそこまで引いてはいなかった上、髪も梳かず、酷いものだった。

「じゃあ…あの番号を書いた紙は、本来雛乃さんの所属部署を書く筈だったんですか？」

「はい、ごめんなさい…」

「いえ、責めているわけじゃありません」

「はい……」

明らかに浮かない顔をしている。確認していない自分が悪いのか…
どうなのだろう。

「そつえば銘、頂いたお菓子を食べるか？」

本郷さん、ナイスフォローだ。

「うん、私持つてくる…」

そつ言うとは急ぎ早に何処かへ行つた。

「うあー！」

平面上で躓くなんて本当に緊張しているらしい。それから間もなく、

ドンという音がしたが、大体予想がついた。その後ジェラートとスプーンを持ってきてくれた。

「美味しいです」

「確かに美味しい、これは一体どこの商品かな？」

「あ、それは姉さんが作ったものなので」

「何と、それは驚いた…」

「また食べたいです」

「姉さん次第だと思うので、約束は出来ませんが、もしあれば持ってくる」

「ありがとうございます」

明るく笑った顔を見て、安心した。

「雛乃さん、そういえば、本来ならばどういった話があったのですか？」

「んぐ…えと、それはですね…セイバーの訓練とか心構えがありました」

「そうですか、自分は結局セイバーに入る　ということになるんですか？」

「はい。あの時の貴方の行動は嘘じゃなかった。って、信じている

ので」

「それってあの時の…」

「そうです。嬉しかった…あの時はだめだったから……」

良くない経験があったのか、さっきまでの明るさが無くなってきた。

「あ、こんなこと、蒼雅さんに言うなんて……ごめんなさい」

「いえ、こちらこそ辛いことを聞いてしまって」

「お父さんみたい」

「え!？」

みたいって、本郷さんのことなのだろうか…少なからず信頼してくれているという嬉しさと、微妙な気分が拮抗している。

「そうか、蒼雅君どうやら君を誤解していた」

「いえ、気にはしてません」

「蒼雅さん、今日は私のせいですみません…」

「気にしないで下さい。今更ですけど、結構楽しかったです」

「ほんとですか?」

「勿論本当ですよ」

「そうだ、蒼雅君。君には遅かれ早かれ多くの試練が待っている。そんな気がしてならない」

「そうなりますか…」

「ああ、遅ければいいがな。まあ儂の勘なんぞあてになるものではないから聞き流してくれ」

「その間に経験を積みれば、良いですけど…」

「きちんと解っているようだな。将来が楽しみだ」

「あ、お父さんも同じことを言ってる」

「それは話してみれば当たり前とも思うがな」

「皆そう言うね」

そんな人ばかりなのだろうか…ふと時計を見る。結構な時間だった。

「申し訳ないのですが、この辺りでおいとまさせていただいても良いですか？」

「あ、もうそんな時間ですか。それでは蒼雅さんまた今度会いましょう」

「そうだな、また時間があれば、家に来てくれ」

「ありがとうございます」

扉を開け、進むと、

「「反対だよ／逆ですよ」」

「……案内をお願いできますか？」

「私が行きますよ」

そしてその後を着いていき玄関に着いた。

「今日は楽しかったですか？」

「楽しかったですよ」

絞められた事以外　　というのは心の中だけの話だ。

「じゃあ、また来てくださいね、絶対に」

「はい、絶対に……」

そういつてスケートボードに乗り、進む。来る時と違って、少し車輪が不安定になっている。帰ってから調整が要るとも思いつながら、スピードは下げずに帰った。

家に着き扉を開けて、そのままスケートボードを自分の部屋に持っていく、分解する。案の定ベアリングの部分がお釈迦になっていた。

「寿命…か。これは買って付け直しかな…」

時間帯もまだ遅くはないので、買いに行くことにした。ボードは使えないので走るしかない…家を出て数分くらいで着いた。

「おう、兄ちゃん。どうしたよ？」

作業服を着た中年の男性が出てきた。人当たりがいい店主だ。

「まあ…正規品はどうも速度が遅くて。解かっているつもりですけどね、それでも」

「まあ、いいけどよ。今回はどれにする？」

「そうですね…これをお願いします」

「これで目利きはいいんだからな、兄ちゃんは…はいよ、まいどあり、あんまりいじくんよ」

「保障は無いけど善処しようかな」

「そつえば、兄ちゃん、例の学園祭はまだなのか？」

すっかり忘れていた。今の学年からレクリエーション名目で無理がない程度に戦い合うという、自分には理解出来ない学校行事があった。ちなみに翔太が勝手にエントリー用紙に名前を書いたので参加することになっている。

「明日だと思います…いえ、明日です」

「なんだ、あるんじゃないか」

何も準備してなかった。というか一週間前に連絡されていたのに……
せめて防具は……あのレプリカの服で良いか。武器は……こちらは何も
無い。別に能力のテストみたいな物だから氷を使っても良いのだから
うけど、十中八九まずいだろう。どうするか……

「あの、ちょっといいですか？」

「何だい、兄ちゃん？」

「なんか武器みたいな置いてるわけ……ないですよ？」

「おいおい、ここはボード類を扱ってる店だぜ？……武器が無いこ
ともないけどよ」

どっちだろう……でも、好都合だ。

「どんなものがありますか？」

「こんなのだけ……」

悪いものじゃない。これは仕込み機能を持っているナイフか……

「このナイフは幾らですか？」

「ああ、こん中のもんは売り物じゃないからおまけでいいぜ」

「良いんですか？」

「男に二言はねえよ」

「じゃ、ありがたく三本程。後、かなり薄めの鉄板はありますか？」

「オーダーメイドのボードに使う余りがあるっちゃああるけど…」

「いくらか貰っていいですか？」

「どうせ売りもんにはならねえから好きなだけもってけよ」

これで武器、防具ともに一安心かな。そんなことを思いながらも足取りは軽く帰っていた。

帰ってすぐにスケートボードの調整を始めて直りはしたが、改造までの時間は無かった。それよりもあのレプリカの服に鉄板を縫込み、ナイフ用のポケットを作った。

「サイズは良いんだけど、やっぱり重くなるな…」

体に慣らす為に着ていることにした。そんな最中部屋の扉が開いた。

「隼君、おそくなってごめんね　なにその格好？」

「セイバーの服、レプリカだけど」

色々と手を加えてあるから実物にも劣らない代物だが…

「じゃ、ご飯作ってるね」

そういつて姉さんは下に降りていった、それから一時間強が過ぎ去

った頃もう特にやることもないので下に降りた。

「姉さん、ご飯は出来た？」

「うん…あともうちよつとなの、待っててね」

「分かったよ」

疲労感が抜けないため軽くシャワーを浴びて部屋へと戻った。そういえば、結局服を着たままだった。ナイフ一本一本を確認して服の中の新しく作ったポケットへとしまう。それも終わり、さっとハンガーに掛けベッドに横になった。少し休んでいると、

「隼君、ご飯出来たからちよつと手伝って」

「分かったよ」

そう言って多少早足に降りていく。

「何を手伝うの？」

「食器を並べてね」

「分かったよ」

そう言って台所に行き、グラスや箸を持っていった。

「ありがとね、隼君」

「別にいいよこの位」

「うん良い弟だから、姉さん幸せだよ」

「そう……」

「冷たいな、隼君」

二つの意味で当たりだよ。なんて、言えないがそう思っておく。

「美味しかったよ。ご馳走様」

「おそまつさま」

「じゃあもう寝るよ、お休み姉さん」

「うん、お休み隼君」

マイペースに階段を上がっていき、そして部屋に入る。再度ベッドに横になり、眠りにつく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4620p/>

平行結晶

2011年10月7日22時23分発行